

以下の報告は、日本の母語、継承語、バイリンガル教育研究会（Mother Tongue, Heritage Language, and Bilingual Education (MHB) Research Association）の海外継承日本語部会のメールリストに 2018 年 3 月 26 日に送られた鈴木庸子先生の報告です。メールの報告書をそのまま掲載いたします。

海外継承日本語部会の皆様へ

お元気でお過ごしのことと存じます。

18 日(日)MHB 研究会の学習会「バイモーダルろう教育」(<http://mhb.jp/>)に参加したので、少しご報告します。海外で参加できなかった部員の方から個人的に内容を教えてほしいとの声をいただきましたので、また私も本当に勉強になったので、ごく簡単で拙いのですがまとめてみました。発表者の先生方が内容に目を通してくださったので、こちらの ML にも送らせていただくことにしました。

テーマ:新時代のマルチリンガル教育を考えるーバイモーダルろう教育からの示唆

3 人の登壇者から 30 分ずつ発表があり、そのあとそれぞれの登壇者の方への質疑応答、討論がありました。ろうの方も多数ご参加くださり、すべての内容に、日本手話の手話通訳がつきました。

一人目の発表は佐々木倫子先生で、ろう教育の歴史、現状をわかりやすく解説してくださいました。体系的ろう教育は 18 世紀にフランスで手話を使った教育が始まっており、その後ドイツでは手話ではなく口話での教育(口の形から音声言語を読みとり、声を出す訓練をするもの)をしています。どこの国でも、ろう者は自分たちの第一言語である自然手話を持っていますが、学校教育の中では、歴史的に見ても、自然手話が用いられることは限られていました。その社会のマジョリティの言語の口話を用いることが多かったのです。

日本では明治時代初期の 1878 年に手まね・身振りをういた教育が始まり、すぐに口話法が広まり始めました。1933 年の文部大臣の訓示は口話法を推進しますが、大阪市立聾啞学校は手話法を続けました。1960 年代に入り、栃木聾学校は指文字と声付き対応手話を用いる「同時法」の研究授業を行い、それを見た純口話法の教員は、長嘆息をしたと言います。音声を育てようと必死なのに、目で見てわかる手段を使うということを受け入れられなかったのです。

その後世界的に、自然手話は言語であるという認識が広まり、日本では 2003 年に保護者らが日本手話の使用を人権救済の申し立てとして、求めました。2008 年にバイリンガルろう教育をめざす明晴学園が設立され、バイリンガルろう教育がスタートしました。自然手話と書記日本語の 2 言語で教育をしていくことへの、批判と批判への反論、ろう児の日本語習得の問題、大阪市立聾啞学校の教育方針(口話法が広まる中で手話法を守った)からの示唆、トランスランゲージングの可能性についても触れられました。

二人目の発表者は北海道札幌聾学校の田中瑞穂先生で、この学校で行ってきたバイリンガルろう教育について報告しました。乳幼児相談室からの聴者の保護者への日本手話講座開設、A ちゃんの成長を通して、A ちゃんが日本手話と音声日本語を習得していく様子を示しました。また小学部の国語の授業と子どもの成果発表のビデオを通して、日本手話で抽象的な学習が成立していることも示しました。

3人目の発表者は明晴学園の岡典栄先生で、日本手話、日本語に次ぐ第三言語としての英語教育について、日本語を介さないほうが良い場合、日本語・英語の連携があるとうまくいく場合を具体例で示しました。音声のない、書記のみの英語使用とはどういうことかの論考があり、さらに、英語話者のゲストと子どもたちがホワイトボードで英語筆談によってコミュニケーションした例をあげて、最終目標は実際に使える英語であると話されました。

最後に座談会として佐野愛子先生の司会のもと、バイリンガルろう教育研究が、バイリンガル教育および日本の英語教育に与える示唆について話し合いました。佐野先生はバイリンガルろう教育と継承語教育の接点として、(1)リテラシー獲得の重要性と難しさ(2)Super Diversity (超多様性)への対応が必要であること、(3)教育的手法としてトランスランゲージング が有効であること、(4)家庭及び地域との連携の重要性 (5)エンパワーメントの重要性 をあげ、それぞれを解説しました。

その後、質疑応答があり、終了しました。

ご報告は以上です。

以下、鈴木のみ言ですが、最近「日本手話は言語である」という考え方が以前よりも、広まったと感じています。たとえば、朝日新聞にろう者の方のいろいろな問題がシリーズで掲載されたそうです。また偶然目にした小説が、『デフ ヴォイス～法廷の手話通訳士』(丸山正樹)という手話通訳士を主人公にしたミステリーで、なかなかおもしろかったです。同じ筆者の『龍の耳を君に』もさらによかったと聞きました。このような中で、MHB が事前学習会を開いて準備をしつつ、夏にバイモーダルろう教育というテーマで、この課題をとりあげたことは、意味があると感じています。ただ、上記のまとめを考えていた3月20日、偶然目に入ったオンラインのニュースに、こんな記事がのっていました。

「手話二つ、戸惑う園児 ろう学園が方針転換、保護者抗議 2018年3月20日 18時43分」

https://www.asahi.com/articles/ASL2M6TTCL2MUTNB022.html?iref=pc_ss_date

埼玉県立ろう学園の幼稚部で、これまで日本手話で保育していたのに、とつぜん、これまでの保育士を解雇し、日本手話のできない、またろう児の保育の経験のない保育士を複数名採用したため、現場が混乱していると保護者がクレームを出し、問題になっている。

というものです。まったく時代に逆行するような事態におどろき、まだまだ社会の認識を変えていく努力が必要なのだと思いました。

この点も、継承語教育に似ていると思いました。

私の認識の不足や誤解もあるかもしれませんが、どうぞお許してください。

夏に東京(ICU)で多くの皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

鈴木庸子